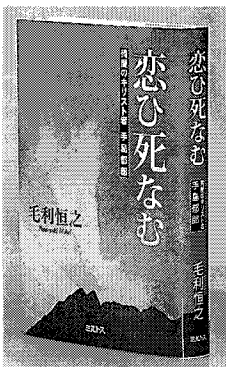
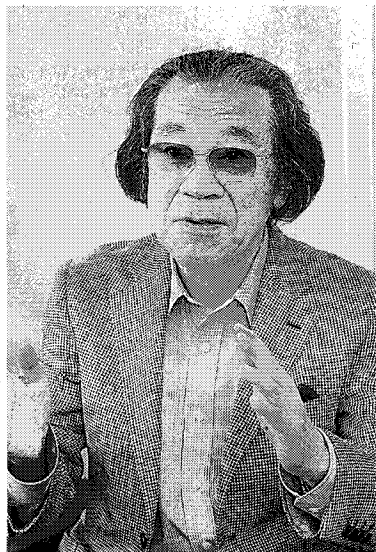


「これまで手島さんの名前が知られなかったのは、『喧伝する必要なし』というご自身の思いがあったからでしょう」と話す毛利さん(熊日本社(大田垣典子))



熊本市出身のキリスト教伝道者・手島郁郎(一九一〇―七三)の半生を描いた「恋ひ死なむ」がこのほど出版された。著者で、大戦末期の特攻隊員の秘話を描いた「月光の夏」でも知られる作家・毛利恒之さん(毛互)東京都杉並区が来熊。「郷土にこういう人物がいたことを知ってほしい」と、市井に生きた熊本ゆかりの宗教者への思いを語った。

手島氏は島根県で生まれ、十歳で両親の郷里、熊本市へ転居。熊本商業学校在学中に受洗。内村鑑三が唱える無教会主義に賛同し、

熊本出身の伝道者・手島郁郎氏描いた毛利さん

もっこす宗教者 伝えたい

熊本を拠点に「熊本聖書研究会」を始めた。イエスが説いた福音を原典から学ぶことを提唱し、晩年は拠点を関西、東京へと移し独立伝道を貫いた。

英語教師や実業家を経て宗教者への道を選んだ手島氏。著書にはその軌跡の重要な転換点として「慶徳小事件」が描かれる。終戦後の学制改革。長男が通う慶徳小を廃校にし、新制中学を設置する案が持ち上がるが、保護者や住民らの訴えで閉鎖は撤回。嘆願の先頭に立ち米軍政官の怒りを買った手島氏は、逃れた阿蘇の山中で啓示を受けたという。「手島氏の信仰は熊本が原点」と毛利さん。自身も熊本大に学び、学生時代、当時熊本市の辛島町で会社経営をしていた手島氏とは「ニアミス」状態だった。「当時出会えなかったのは残念だが、『もっこす』『異風者』でもあった手島さんの生涯を、宗教を越えて多くの人に伝えたい。伝承や記録を、客観的に調べ上げたのもそんな思いからです」と語った。(勝木みゆき)

※「恋ひ死なむ」はミルトス判。

二百七十五頁、B6判。千五百七十五円。毛利さんが原作・脚本を担当したドキュメンタリー映画「手島郁郎の記録―暮屋の夜明け」は来年一月、熊本で上映予定。